

(2) 研 究 会

昭和58年度より従来からのやや規模の大きな「研究会」と小規模の「ミニ研究会」の二本立てで実施し、後者は発足したばかりの「計画研究」に対応したものと位置づけられた。昭和58年度に採択された研究会は以下のとおりである。

A. 研究会

1. ニホンザル野外観察施設における研究の現状と課題
2. 霊長類研究への実験動物学的アプローチ
1. 霊長類と疾病
3. 霊長類の性と生殖の中枢機序
4. 第13回ホミニゼーション研究会

B. ミニ研究会

1. ニホンザルを主とした霊長類の初期発達過程
2. 霊長類二足性の生物力学的分析
3. 霊長類臼歯の機能の基礎となる形態をめぐって
4. 血液タンパク質を分子指標とした霊長類の系統と進化

2. 研究 成 果

A. 計 画 研 究

課 題 1

サル の 耕 地 回 避 学 習 の 社 会 学 的 研 究

乗越皓司・吉場都子・原久美子（上智大・理工）

本研究は、強煙火システム作動時の群れの反応を、特にリーダーと他個体との機能的関係を重視しつつ観察し、耕地回避が社会的学習として成立する機構を明らかにすることにある。

木曽研究林のS群とK群を研究対象に選び、人つけ、個体識別等の予備研究が3～5月に3回、計28日間行われた。

7月上旬に設置された強煙火システムの作動は、農作物が実る11月までの間に、以前に比べて激減している耕地接近の際はほぼ正常に働いており、S群およびK群とも、耕地回避のはっきりした学習

効果が認められていた。しかし、耕地回避学習が早くから進んでいたK群においては、強煙火爆発に対して、以前より遠くまで群れが回避することが少なく、一種の慣れが起こりつつあることがうかがわれた。煙火爆発後の群れ逃走の際、リーダーらしき成体の木ゆすりや警戒の音声にかかわらず、群れ全体が近くに留まっている事例がみられ、これは、群れレベルで学習される行動とそれを除去する個体との対立の現われかもしれない興味深い例であり、今後さらに分析する必要がある。

岡山県大佐町における自然開発事業の進行とそれに伴う野生ニホンザルの分布および遊動域の変化

小山高正（お茶の水女子大・家政）、安藤明人（美作女子大）、渡辺義雄（阪大・人間科学）

昨年度の調査で、大佐町及びその周辺には野生ニホンザルの群れが6群いることが明らかになった。そして、同町における開発事業の進行に伴い、サルによる農作物の被害が増加していることも示唆されていた。本年度の聞き込み調査では、新見市阿哲郡の地方振興局で、ニホンザルについて、大佐町に4群300頭、哲多町に3群60頭、神郷町に3群150頭がいると推定しており、57年度には有害鳥獣として30頭が捕獲されていた。

本年度は調査の範囲を大佐町上刑部地区に絞り、ニホンザルの群れの分布と住民のサルに対する意識の調査をアンケートによって行った。上刑部地区で、6日間サルの群れを観察でき、特に5月2日から5日の期間には複数の群れを同時に観察できた。その結果、この地区には、つづら畑群、赤松群、定藤群の計3群のいることが確認できた。次に、アンケートによる調査では、サルの害がみられた地域に55通の質問紙を配り、46通の回答が得られた。最初にサルを見た年と場所、最初にサルの害をうけた年と場所を答えてもらった結果から、サルと住民との接触はだんだん増えており、その範囲も広がっていることがわかった。また、被害の例は昭和30年代から急増している。開発に対する考え方とサルに対する意識については、全体的に開発優先でサルを根絶するという意見が強い。すなわち、当地区では、ほとんどの人は開発をすればサルの害が増えるのはわかっているが、とにかく開発を進めてほしいと考えており、開発

の結果、サル被害が増えればサルを根絶すればよいと考えている。しかし、その中で比較的最近になってサルと接触するようになった地域で山の動物との共存や計画的開発を考えている人もいくらかはいるようである。当地区では、山林の開発による自然環境の変化がサル被害の増加の一因と考えられるので、今後、被害を予防する意味で、計画性のある開発が望まれる。

野猿公苑における生態系の保全と野外博物館活動の研究

正高信男（学振奨励研究員）・和泉剛（関西相互環境センター）・岩井健二（鴨沂高）
・太田映司（柏野小）

嵐山自然公苑は、研究上極めて重要な位置を占めると同時に、市街地に隣接しており、絶えずポピュレーション増大と猿害の発生という深刻な問題をかかえている。われわれが行った研究からは、次のような点が示唆された。

1. 研究期間中、数度にわたってリーダーの失踪がみられたが、それによって、集団がさして動揺する様子もなかった。嵐山集団に特有の条件の関与を考えねばならないが、餌付けによる集団の一定地点への求心的定着が強く関連していると思われた。
 2. ポピュレーションの増大は決して餌場の個体密度増大には結果せず、むしろ周辺化の促進と低順位メスとその子のそれへの参入が見られた。それは集団の分裂の可能性をはらむものとみなされ、その動態は極めて興味深い、同時に猿害に直結する問題でもある。
 3. それゆえ、公苑維持上の管理的理論として、および、研究の長期的継続の観点からも、ポピュレーションのある程度の調整はやむを得ぬ措置としてなさざるを得ない。そのためには、過去の研究経緯をふまえ、血縁関係その他を考慮しつつ、長期展望に立った研究者との緊密な連絡が必要であろう。
 4. 観光客による不特定の給餌は、研究活動にとっては妨害要因となった。もとより野猿公苑のひとつの目的として営利性があり、困難な面もあるが、改善の方向を模索したい点である。
- 野外博物館活動については、博物館の効率的な

運営や取組みを考えるために、観光客、友の会、小・中・高校生を対象に、意識調査を試みた。

1. 楽しむ場の横溢により、野猿公苑への関心は極めて低い。
2. 自然や動植物に対する実質的な認識は低く、見て楽しむ一時的なものである。等々。

上記分析結果に基づき、野猿公苑が多くの人達に、観察・活動・作業をする場面を提供し、有機的な取り組みと運営の工夫を進めつつある。

課 題 2

志賀高原横湯川流域に住むニホンザル、A₁、A₂、B₂、C群の戸籍簿作り

常田英士（地獄谷野猿公苑）

ニホンザルの諸調査に際し、個体識別が必要である場合が殆んどである。更に群内の個体の血縁関係が分かっていると、多くの研究にとって有益である。

本調査は地獄谷野猿公苑に以前から蓄積されている資料に基づき、志賀高原の横湯川流域に生息するニホンザル志賀A₁群（約140頭）、A₂群（約80頭）、B₂群（約35頭）、C群（約45頭）の戸籍簿を作成し、研究者が利用できるようにすることを目的とした。

昭和58年度はA₁群、A₂群の全個体について個体カードを作成し、血縁図を作った。A₁群については3才以上、A₂群については1才以上の全個体の顔写真を撮影し、個体カードに貼った。C群については約半数の個体の顔写真を撮った。昭和59年度にはC群の残りの個体とB₂群と、過去に横湯川の各群に所属していたが現在はいないオスについての個体カードを作成する予定である。

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性

小見山章（岐阜大・農）・和田一雄（京大・霊長研）
* 共同実研者

森林におけるニホンザルの行動を規制するのは、食物の分布と冬期のとまり場である。我々は志賀高原横湯川流域において、食物となる森林植物の